

日本生態学会第 53 回大会(2006 年 新潟市)のお知らせ

—最新情報はウェブで(www.esj.ne.jp/meeting/53/)—

日本生態学会第 53 回大会 (JES53) は新潟コンベンションセンター「朱鷺メッセ」にて 2006 年 3 月 24 日 (金) ~ 28 日 (火) に開催の予定です。第 53 回大会は東アジア生態学会連合第 2 回大会 (EAFES2) と同時開催となります。日本生態学会の会員は JES53 に申し込んでいただきますと、自動的に EAFES2 にも参加登録され、両方で発表することができます。

シンポジウム、一般ポスター発表および口頭発表、自由集会に加え、EAFES2 では毎朝プレナリー (全員参加) レクチャーを行います。EAFES2 での発表は英語で行なっていただきます。なお、ポスター発表以外は、すべてパソコンと液晶プロジェクターを使用したマイクロソフト・パワーポイントによる発表に限定させていただきます。スライド・OHP は使用できません。

また、第 53 回大会からは学会の大会企画委員会がシンポジウムの企画と一般発表のプログラム編成を行います。一般発表の申し込みの受け付け要領は次号に掲載します。また自由集会の募集も同時に行います。詳しい大会スケジュール、自由集会の募集などの最新情報はウェブ上に掲載しますのでご覧ください。(www.esj.ne.jp/meeting/53/)

第 53 回大会会長 三浦慎悟

同実行委員長 紙谷智彦

日程：2006 年 3 月 24 日 (金) から 28 日 (火)

会場：朱鷺メッセ (新潟コンベンションセンター)

〒 950-0078 新潟市万代島 6 番 1 号

TEL 025-246-8400 / FAX 025-246-8411

<http://www.niigata-bandaijima.com/>

問い合わせ連絡先：紙谷智彦

(crenata@agr.niigata-u.ac.jp)

新潟大学農学部生産環境科学科

〒 950-2181 新潟市五十嵐 2 の町 8050

[目次]

公 告

- 第4回（2006年度）「日本生態学会賞」候補者推薦のお願い
- 第10回（2006年度）「日本生態学会宮地賞」候補者募集

記 事

- I. 新委員会の設置について.....1
 - a. 日本生態学会大会企画委員会の設置趣旨.....1
 - b. 日本生態学会国際対応委員会の設置趣旨.....1
 - c. 「野外安全管理委員会」を常設委員会として設置する提案.....2
- II. 学会賞各章受賞者の決定.....2
- III. 書評依頼図書.....2
- IV. 寄贈図書.....3
- V. 交換雑誌目録.....3

お知らせ

- 1. 公 募.....3
- 2. 「アーバスキュラー菌根の基礎実習」参加者の募集.....4
- 3. 第8回マリンバイオテクノロジー学会大会（マリンバイオ熊本2005）.....4
- 4. アブラムシ・カイガラムシ生物的防除国際シンポジウム開催のお知らせ.....5

公募カレンダー.....6

書 評.....7

京都大学生態学研究センターニュース.....10

日本生態学会役員一覧.....11

公 告

第4回（2006年度）「日本生態学会賞」 候補者推薦のお願い

「日本生態学会賞」は、顕著な研究業績により生態学の深化や新たな研究展開に指導的役割を果たした本学会員に対して授与される日本生態学会の最も権威ある賞です。細則にありますように、受賞者は会員から推薦された候補者の中から選考され、大会時において表彰されます。

このたび、第4回の授賞に先立ち、会員の皆様に受賞候補者の推薦をお願いいたしたく存じます。この賞の趣旨を充分ご理解のうえ、下記の要領で奮ってご推薦頂きますようお願い申し上げます。

2005年4月1日
日本生態学会会長
鷺谷 いつみ

記

1. 受賞候補者の条件：本学会員
2. 書 式：本誌綴じ込みの推薦用紙（別紙添付可）
3. 送付先：〒739-8521 東広島市鏡山1-7-1
広島大学大学院生物圏科学研究科環境循環系制御学専攻
日本生態学会事務局気付
日本生態学会賞選考委員会委員長
4. 締め切り日：2005年8月15日（必着）

以 上

日本生態学会賞細則

- 第 1 条 日本生態学会賞は、本学会員で、顕著な研究業績により生態学の深化や新たな研究展開に指導的役割を果たし、本学会員により推薦された者の中から、以下に述べる選考を経て選ばれた者に授ける。なお、受賞は毎年 1 名とする。
- 第 2 条 日本生態学会賞候補者を選考するため、日本生態学会賞候補者選考委員会（以下委員会）を設ける。
- 第 3 条 委員会の委員は 6 名とする。委員の選出は全国委員会での互選による。その際、生態学の各分野にわたるよう十分に留意して投票を行う。委員長は委員の互選により毎年定める。委員の任期は 2 年とし、毎年 3 名を改選する。ただし任期満了後 2 年間は再選されることができない。会長は全国委員会の同意を得て、2 名までの委員を会員の中から選び、追加委嘱することが出来る。ただし、委嘱委員の任期は 1 年とする。
- 第 4 条 推薦者は、推薦理由を添えて候補者を推薦するとともに、委員会の求めに応じて必要な資料を提出する。
- 第 5 条 委員会は推薦理由をもとに受賞候補者を絞り、推薦者が提出する資料にもとづいて 1 名の受賞候補者を選び、選定理由を付けて会長に報告する。なお、受賞候補者が無い場合も、その旨を会長に報告する。選考にあたっては、原著論文業績の他に啓蒙的役割を果たした著書類及びそれらの国内外の波及効果に留意する。
- 第 6 条 選考委員が被推薦者となった場合で、選考の最終段階に候補として残った場合には、選考委員会からはずれるものとする。
- 第 7 条 会長は委員会が選定した候補者について、その賛否を全国委員会に諮り、有効投票のうち 3 分の 2 以上の賛成がある場合、これを受賞者として決定し、直ちに本人に通知をする。また、受賞候補者が無い場合には、全国委員会の了承を受けて、受賞者が無いことを会員に公表する。
- 第 8 条 受賞者の決定は、受賞式が行われる 3 ヶ月前までに行う。
- 第 9 条 授賞式は大会において行い、受賞者には賞状及び記念品を贈呈する。
- 第 10 条 受賞者は、原則として、その授賞式が行われる大会において記念講演し、その内容を本学会の学会誌に総説として投稿する。
- 第 11 条 この細則の変更には全国委員会の 3 分の 2 以上の同意を要する。

第4回（2006年度）「日本生態学会賞」 受賞候補者推薦用紙

日本生態学会賞選考委員会委員長殿

下記の者を、日本生態学会賞に推薦いたします。

2005年 月 日

推薦者氏名： 印

連絡先：

記

1. 受賞候補者

氏名：

生年月日：

所属：

連絡先：

2. 推薦理由

3. 主要な業績

切

り

取

り

線

公 告

第 10 回（2006 年度）「日本生態学会宮地賞」

候補者募集

「日本生態学会宮地賞」は生態学に大きな貢献をしている本学会の中堅または若手会員に対して、その研究業績を表彰することにより、わが国の生態学の一層の活性化を図ることを目的とするものです。

会員の自薦による応募者、もしくは会員から推薦された者の中から 2 名以内の受賞者を選考し、「日本生態学会宮地基金」から各々 30 万円の賞金が贈呈されます。

受賞候補者の募集を下記の要領で行いますので、この賞の趣旨を充分ご理解のうえ、奮ってご応募、ご推薦頂きますようお願い申し上げます。

2005 年 4 月 1 日
日本生態学会会長
鷺谷 いづみ

記

1. 受賞候補者の条件：本学会の中堅または若手会員
2. 書式：本誌綴じ込みの応募（推薦）用紙（別紙添付可）
3. 送付先：〒 739-8521 東広島市鏡山 1 - 7 - 1
広島大学大学院生物圏科学研究科環境循環系制御学専攻
日本生態学会事務局気付
日本生態学会宮地賞選考委員会委員長
4. 締め切り日：2005 年 8 月 15 日（必着）

以 上

日本生態学会宮地賞細則

- 第 1 条 日本生態学会宮地賞（以下宮地賞という）は、本学会員で、生態学の優れた業績を挙げた、自薦による応募者もしくは本学会員により推薦された者の中から、以下に述べる選考を経て選ばれた者に授ける。なお、授賞は毎年 2 名以内とする。
- 第 2 条 宮地賞受賞候補者を選考するため、宮地賞受賞候補者選考委員会（以下委員会という）を設ける。
- 第 3 条 委員会の委員は日本生態学会賞候補者選考委員が兼ねる。
- 第 4 条 委員会は 2 名以内の受賞候補者を選び、選定理由を付けて会長に報告する。なお、受賞候補者が無い場合も、その旨を会長に報告する。選考にあたっては、日本生態学会の英文誌または和文誌への本人の掲載論文の有無、及び会員歴にも留意する。
- 第 5 条 選考委員が被推薦者となった場合で、選考の最終段階に候補として残った場合には、選考委員会からはずれるものとする。
- 第 6 条 会長は委員会が選定した候補者について、その賛否を全国委員会に諮り、有効投票のうち 3 分の 2 以上の賛成がある場合、これを受賞者として決定し、直ちに本人に通知をする。また、受賞候補者が無い場合には、全国委員会の了承を受けて、受賞者が無いことを会員に公表する。
- 第 7 条 受賞者の決定は 11 月中旬までに行う。
- 第 8 条 授賞式は大会において行い、受賞者には賞状および宮地基金より賞金 30 万円を贈呈する。
- 第 9 条 受賞者は受賞の対象となった研究業績について、原則として、その授賞式が行われる大会において講演し、その内容も含めた総説を本学会の学会誌に投稿する。
- 第 10 条 この細則の変更には全国委員会の 3 分の 2 以上の同意を要する。

（1998 年 3 月 26 日改訂）

（2000 年 3 月 10 日改訂）

（2002 年 3 月 28 日改訂）

第10回（2006年度）「日本生態学会宮地賞」 受賞候補者応募（推薦）用紙

日本生態学会宮地賞選考委員会委員長殿

下記のごとく，日本生態学会宮地賞に応募（推薦）いたします。

2005年 月 日

応募者（または推薦者）氏名： 印

連絡先：

記

1. 受賞候補者

氏名： 生年月日：

所属：

連絡先：

2. 応募（推薦）理由

3. 受賞対象となる研究内容（なるべく具体的にお書き下さい。書ききれない場合は別紙添付可）

4. 業績目録（A4版の別紙に，論文業績，学会等での研究発表などを重要と思われるものより順にお書き下さい）

5. 主要論文の別刷（5編以内を添付願います）

6. 会員歴（学会入会年，学会での研究発表歴など）

切
り
取
り
線

記 事

I. 新委員会の設置について

常任委員会より新委員会の設置が提案され、全国委員会に承認されました。

(各委員会委員は日本生態学会役員一覧に記載)

a. 日本生態学会大会企画委員会の設置趣旨

会長 鷲谷 いづみ

生態学会・年大会の規模(参加人数、シンポジウム・一般講演数)などが年々増加し、現在参加人数は1400～1700名となり、講演数は1000近くとなっています。そのため、大会実行委員会の負担は労力的、財政的にも増大し、地区会での持ち回り担当のシステムを維持するためには、大会開催経験の蓄積と大会運営の効率化は不可欠となっています。また、年大会は生態学会の最大の行事で、その在り方は学会の今後の趨勢に大きく影響を及ぼし、一人一人の会員や広く社会の要望・期待に応え、かつ今後の生態学の進展を計る上で重要な機会でもあります。

そのためには、従来の開催地の実行委員会のみで、大会開催・運営を行うには限界に来ており、大会開催・運営において、大きな部分を占め、しかも経験と系統性、一貫性、そして広く会員の要望への対応が求められる大会プログラム編成や大会参加・講演登録受付や講演要旨の編成・印刷については恒常的な委員会(大会企画委員会)を設置し、そこが主に担当することが必要と考えます。また、当該委員会では、従来「大会検討委員会」が果たしてきた中長期の視点から大会の在り方そのものの検討も行うことといたします。

さらに、東アジア生態学連合の大会開催などの行事も年大会と連携して開催することが決まっております。これらの新たな取り組みは、益々このような恒常的な大会企画や運営を分担する委員会の必要性を示しているといえます。

当然、従来の開催地の会員による実行委員会の役割はきわめて重要であることには変わりありません。会場の設営、参加者の受付・案内、資料の配布、大会当日のプログラムの運営・進行、さらに開催地の特色を生かした懇親会やその他催しの企画・運営、地元の行政などの団体への大会開催補助金の申請など、数えればきりがありません。今回の常置委員会の設置により、これらへの労力を実行委員会がより一層割くことを可能とし、大会の行事としての内容が充実することも期待できます。

以上より、従来の「大会検討委員会」をも統合した「大会企画委員会」の設置を以下のように提案いたします。ただし、取扱い事項(例えば1.2))の詳細について、実行委員会との分担は再度この委員会で検討します。

1. 目的：当該委員会は以下の項目について審議し、決定する。ただし、項目1.1)などの重要な問題についてはその審議結果を常任委員会に答申する。常任委員会は

これを審議し、その結果を全国委員会に提案する。

- 1) 大会の在り方全般についての検討
- 2) 大会プログラムの編成(シンポジウムの企画、募集、EAFESなどの国際会議の企画などを含む)
- 3) 大会案内の作成、参加・講演の登録受付、講演要旨の受付・編成・印刷とウェブ上での記載など
- 4) ポスター賞選考方法・選考委員の選定、受賞者の決定

2. 委員会の構成：委員会は下記の委員から構成し、正副委員長を互選する。また、正副委員長と項目3で示す部会の部会長、学会事務幹事でもって幹事会を設置する。

- 1) 当年と前後年の開催地の実行委員会の委員長を含む委員若干名
- 2) 常任委員会の担当委員
- 3) 国際対応委員会(注)委員若干名
- 4) 電子化整備検討委員会委員若干名
- 5) 学会事務局幹事
- 6) 全国委員会から推薦されたもの若干名

(注)：EAFESなどの国際会議、国際活動における学会窓口の担当委員会で、当該委員会と合わせて設置予定

3. 部会の設置：委員会内に、作業部会として以下の部会を設置する。

- 1) プログラム編成部会：項目1.2)の作業を行う
- 2) 大会運営部会：項目1.3)の作業を行う
- 3) ポスター賞部会：項目1.4)の作業を行う

4. 委員会事務：委員会担当項目については、多大な事務量が伴う。そのために、当該委員会の事務については、固定化した事務局事務部と大会事務担当として雇用するアルバイトを充てる。

5. 委員の任期：委員の任期は3年とするが、項目2.2), 3), 4)の委員についてはその委員会の委員の任期とし、再任をさまたげない。6)の委員については1/3の委員が毎年更新されるよう、選出にあたって配慮する。

以上。

b. 日本生態学会国際対応委員会の設置趣旨

会長 鷲谷 いづみ

近年、国際的な研究プロジェクト、IGBP、SCOPE、DIVERSITASや国際地球環境モニタリング計画など一國の枠を越えた研究計画や交流が盛んに進められており、関連学会としての生態学会の組織的対応が求められています。そのために、2003年には「大規模長期生態学専門委員会」を新たに設置いたしました。また、国際生態学連合(INTECOL)や2002年に創立した東アジア生態学連合(EAFES)など諸外国の生態学者と学会レベルで交流や共同研究を進展する機運と必要性が強まっております。また、国内外で、生態学関連の国際会議が開催されたり、開催が多々予定されております。当面、第二回アジア生態学連合大会の主催、アジア太平洋学術

会議の共催などをはじめとして、日本生態学会が大きく係わることが求められている国際活動が数多く予定されております。

日本生態学会が東アジア、東南アジアなどアジア諸国の生態学会、生態学者との研究交流や共同研究を意識的に、組織的に取り組みながら、欧米、そして広く世界の生態学会、生態学関連組織及び生態学者とのより一層の交流、連携、共同を推進するためには、一部の関連する課題については「大規模長期生態学専門委員会」と連携しつつ、その全体を担当する常置の委員会が是非とも必要です。

以上より、「国際対応委員会」の設置を以下のように提案いたします。

1. 目的：アジアや国際的な生態学関連の組織・団体との学会の連絡・対応窓口として、また国際的な研究交流、共同研究の推進役として機能し、さらに INTECOL, EAFES, アジア太平洋会議などの国際大会がわが国で開催される際は、学会を代表してその組織・運営を担当する。

2. 委員の構成：委員会は下記の委員から構成する。委員長は常任委員会の EAFES 担当委員を充てる。

- 1) 常任委員会の EAFES 担当委員
- 2) 大規模長期生態学専門委員会委員 1 名
- 3) 全国委員会から推薦されたもの若干名
- 4) 幹事長

また、上記の委員とは別に、日本学術会議会員と SCOPE 専門委員会の委員を常任オブザーバーとして当該委員会に参加して頂くとする。

3. 委員の任期：委員の任期は 2 年とし、再任をさまたげない。ただし、項目 2.3) 以外の委員はその役職または委員の任期をもって、当該委員会の任期とする。

c. 「野外安全管理委員会」を常設委員会として設置する提案

フィールド障害保険委員会

フィールド障害保険委員会において、日本生態学会員の野外活動での事故を想定した場合に適切な内容を持つ保険契約について検討を重ねてきた。そのなかで保険契約の締結も重要であるが、それ以上に十分な事前研修・ガイドンス、安全管理マニュアルの整備、あるいは事故が起こった場合の支援体制の充実など、学会としての危機管理制度の確立が必要であるということが、各委員の共通認識となってきた。

いつどこで起こるかかわからないフィールドの事故であり、遭難者の所属する団体によっては組織的な対応が困難である可能性があることから、日頃から安全管理に関する啓蒙活動と提言、危機管理に関するマニュアルや緊急連絡網などの作成を行うとともに、万が一に事故が起こった場合に、捜索隊や対策本部、マスコミ対策など、

個々のケースで要求される個別の支援体制を時間ロスなしに打ち立てるため、日本生態学会の常設委員会として「野外安全管理委員会」を設置することを提案する。

委員会の任務：

- 1) 安全管理マニュアルの作成とその普及活動
- 2) 大小の事故における原因究明とそのフィードバック制度の確立

また、以下の点について学会がどのように関与していくかも委員会において検討する。その際、研究機関が対応できる場合には学会はバックアップの役割を果たす方向で考え、研究機関が充分対応できない場合に学会自体がかかわる可能性を主に検討する。

- 3) 緊急連絡網と支援体制（捜索隊、対策本部、マスコミ対策など）の確立
- 4) フィールドワークごとの調査届・終了届制の整備

委員会構成：

現在のフィールド障害保険委員会委員（粕谷英一、大館智志、鈴木準一朗、湯本貴和）と全国委員会推薦（若干名）でスタートし、任期は 2 年、再任をさまたげない。

II. 学会賞各章受賞者の決定

学会賞各賞の受賞者は下記のように決定しました。

1. 第 3 回日本生態学会賞受賞者
広瀬忠樹（東北大学大学院生命科学研究科・教授）
2. 第 9 回日本生態学会宮地賞受賞者
吉田丈人（Cornell University, USA）
深見 理（Landcare Research, New Zealand）

III. 書評依頼図書（2004 年 8 月 24 日～2005 年 2 月 13 日）

現在、下記の図書が書評依頼図書として学会事務局に届けられています。書評の執筆を希望される方には該当図書を差し上げます。ハガキ又は E メールで、ご所属・氏名・住所・書名を学会事務局（ecoffice@hiroshima-u.ac.jp）までお知らせ下さい。なお、書評は 1 年以内に掲載されるようご準備下さい。

1. 小池孝良編「樹木生理生態学」（2004） 266 pp. 朝倉書店 ISBN: 4-254-47037-1
2. 橘川次郎著「メジロの眼 行動・生態・進化のしくみ」（2004） 328 pp. 海游舎 ISBN: 4-905930-82-0
3. 大串龍一著「kupu-kupu の楽園 一熱帯の里山とチョウの多様性」（2004） 256 pp. 海游舎 ISBN: 4-905930-37-5
4. M.G.turner, R.H.Gardner, R.V.O'Neill 著 中越信和・原慶太郎監訳「景観生態学：生態学から新しい景観理論とその応用」（2004） 400 pp. 文一総合出版 ISBN: 4-8299-1062-3
5. 桑村哲夫著「性転換する魚たちーサンゴ礁の海からー」（2004） 216 pp. 岩波新書 ISBN: 4-00-430909-3
6. 大井徹著「日本の森林/多様性の生物学シリーズ③獣

- たちの森」(2004) 246 pp. 東海大学出版会 ISBN: 4-486-01654-8
7. 安井金也・窪川かおる著「ナメクジウオ」(2004) 278 pp. 東京大学出版会 ISBN: 4-13-066154-X
8. 小川和夫著「魚類寄生虫学」(2004) 218 pp. 東京大学出版会 ISBN: 4-13-070100-2

IV. 寄贈図書

1. 「うみうし通信 No.45」(2004) 12 pp. 水産無脊椎動物研究会
2. 「国際生物学賞 20 年の歩み」(2004) 122 pp. 独立行政法人日本学術振興会国際生物学賞委員会
3. 「第 54 回東レ科学振興会科学講演会記録」(2004) 38 pp. 東レ科学振興会
4. 「こうえいフォーラム第 13 号」(2004) 110 pp. 日本工営(株)
5. 「北極圏科学観測ディレクトリー 2004 年度版」(2004) 128 pp. 国立極地研究所北極圏環境研究センター

V. 交換雑誌目録 (2005 年 3 月現在)

1. Acta Phytocologica Sinica
2. Acta Zoologica Fennica
3. adansonia
4. Annales Botanici Fennici
5. Annales Zoologici Fennici
6. Archiv für Molluskenkunde
7. Botanica Helvetica
8. Bulletin of the Geobotanical Institute ETH Entomology Series
9. BREVIORA
10. Brittonia
11. Chinese Journal of Applied Ecology
12. Chinese Journal of Ecology
13. Ecography
14. Entomologische Berichten
15. Folia Geobotanica
16. Korean Journal of Environment and Ecology
17. Memoranda
18. MICRONESICA
19. OIKOS
20. ORSIS
21. PLoS Biology
22. Polish Journal of Ecology
23. Scientia Marina
24. Senkenbergiana Biologica
25. Sichuan Alpine Ecology Study
26. SPIXIANA
27. Systematics and biodiversity
28. The BIOLOGICAL BULLETIN
29. The Botanical Review
30. The Bulletin/British Ecological Society
31. Tropical Ecology
32. Vie et Milieu
33. З К О Л О Г И Я

34. З К О Л О Г И Я М О Р Я
35. Л Е С О В Е Д Е Н И Е
36. Х а б а р л а р ы Ц э в е с м ц я

お 知 ら せ

1. 公募

日本生態学会に寄せられた公募について、①対象、②助成又は賞などの内容、③応募締め切り、④申し込み・問い合わせ先をお知らせします。

(1) 東レ科学技術賞

- ①学術上の業績が顕著あるいは重要な発見・発明をしたもの。技術上重要な問題を解決して、技術の進歩に大きく貢献したものの。
- ②2 件前後。1 件につき賞金 500 万円
- ③2005 年 10 月 7 日 (金) 必着
- ④日本生態学会事務局 (*学会推薦が必要です)
- 参照: <http://www.toray.co.jp/tsf/index.html>

(2) 東レ科学技術研究助成

- ①国内の研究機関において、独創的、萌芽的研究を活発に行っている若手研究者
- ②10 件程度、1 件 3000 万円程度まで
- ③2005 年 10 月 7 日 (金) 必着
- ④日本生態学会事務局 (*学会推薦が必要です)
- 参照: <http://www.toray.co.jp/tsf/index.html>

(3) 下中科学研究助成金

- ①全国小・中・高校の教員 (教育センター、盲・聾・養護学校を含む)
- ②30 万円 (1 件)。総額 900 万円。
- ③2005 年 12 月 10 日
- ④下中記念財団事務局
- Tel: 03-5261-5688 Fax: 03-3266-0352
- URL: <http://www.shimonaka.or.jp/>
- E-mail: info@shimonaka.or.jp

(4) 公益信託富士フィルム・グリーンファンド

- ①身近な自然を守るために地域に根づいた活動をしてきた方、あるいは環境保全の研究を実際に進めてきた方で、この助成によって大きな進展が望める活動や研究。
- ②助成総額 650 万円。3 件程度。
- ③2005 年 5 月 16 日 (月) 当日消印有効
- ④〒110-8676 東京都台東区下谷 3-10-10 財団法人自然環境研究センター内 公益信託 富士フィルム・グリーンファンド事務局
- Tel: 03-5824-0955 Fax: 03-5824-0956
- <http://www.jwrc.or.jp/>

(5) 公益信託四方記念地球環境保全研究助成基金

- ①下記のいずれかをテーマとした、海外を場とした現地での調査をとまなう独立した研究

- ・熱帯雨林の減少、砂漠化の進行等の地球規模の自然環境問題に関する調査・研究
- ・絶滅のおそれのある生物等の生態及びその保護・回復に関する調査研究
- ・人間の生活と両立する自然環境、野生生物等の管理手法に関する調査・研究

② 1件あるいは2件。総額 50 万円。

③ 2005 年 5 月 20 日（金）当日消印有効

④ 〒 110-8676 東京都台東区下谷 3-10-10

財団法人自然環境研究センター内
公益信託四方記念地球環境保全研究助成基金事務局
Tel: 03-5824-0960 Fax: 03-5824-0956
<http://www.jwrc.or.jp/> 担当：植村・菰田

(6) 公益信託ミキモト海洋生態研究助成基金

① 潮間帯から浅海にわたる海域に生息する生物・生息環境・保全に関する調査・研究

② 総額 300 万円

③ 2005 年 5 月 10 日（火）当日消印有効

④ 〒 110-8676 東京都台東区下谷 3-10-10

財団法人自然環境研究センター内
公益信託ミキモト海洋生態研究助成基金事務局
Tel 03-5824-0960 Fax 03-5824-0956
<http://www.jwrc.or.jp/> 担当：植村・菰田

(7) 公益信託増進会自然環境保全研究活動助成基金

① 絶滅のおそれのある小動物の保護・増殖に関する調査・研究および、生息環境保全と環境復元・回復に関する調査・研究

② 1 件 50 万円

③ 2005 年 5 月 20 日（金）当日消印有効

④ 〒 110-8676 東京都台東区下谷 3-10-10

財団法人自然環境研究センター内
公益信託増進会自然環境保全研究助成基金事務局
Tel 03-5824-0960 Fax 03-5824-0956
<http://www.jwrc.or.jp/> 担当：植村・菰田

2. 「アーバスキュラー菌根の基礎実習」参加者の募集

アーバスキュラー菌根 (=VA 菌根) は、ほとんどの陸生植物に形成される植物根-糸状菌の共生形態で、多くの陸上生態系から普遍的に見いだされます。生態系におけるアーバスキュラー菌根の役割はきわめて多様であるため、生態学の様々な分野において注目されています。今回、アーバスキュラー菌根研究の基礎な手法について実習を行いますので、ご参加下さい。

開催場所：畜産草地研究所（草地研究センター）

<http://nilgs.naro.affrc.go.jp/>

〒 329-2793 栃木県那須塩原市千本松 768

開催時期：5 月 20 日（金）～ 22 日（日）（2 泊 3 日）

内 容：実習（野外試料採集、根内菌糸の観察、菌根菌胞子の回収・同定）、

講義（アーバスキュラー菌根の紹介）

募集人数：20 人（原則各研究団体 1 人）

参加費用：実費（宿泊費、食費、懇親会費含む。宿泊は、研究所内の安価な施設を利用可能）

共 催：菌根研究会、菌学若手の会

講 師：齋藤雅典（農環研）、俵谷圭太郎（山形大）、唐澤敏彦（北農研）

世話人（兼実習講師）：小島知子（畜草研）、齋藤勝晴（東大）、藤吉正明（東海大）、大場広輔（横浜国大）

希望者は、タイトルを「菌根実習希望」として、氏名、所属、電話番号を記入したメールにて、5 月 6 日までに下記連絡先までお申し出下さい。また、応募は定員に達した段階で締め切らせて頂きます。

メール連絡先：小島知子 (kojima@naro.affrc.go.jp)

3. 第 8 回マリンバイオテクノロジー学会大会 （マリンバイオ熊本 2005）のお知らせ

主 催：マリンバイオテクノロジー学会

会 期：平成 17 年 5 月 28 日（土）～ 29 日（日）

会 場：熊本県立大学新講義棟
（〒 862-8502 熊本市月出 3-1-100）

発表形式：口頭発表（質疑含み 15 分、OHP 使用）、ポスター発表

大会内容：1. 一般講演（口頭発表、ポスター発表）、2. シンポジウム、3. 懇親会

一般講演のセッション：以下の 9 セッションを予定しております。①微生物 ②微細藻 ③海藻・附着生物 ④魚介類 ⑤天然物・未利用資源 ⑥バイオミネラルゼーション ⑦マリンゲノム ⑧環境・温度適応 ⑨その他

参加申込方法：参加をご希望の方は申込者氏名・所属及び連絡先（住所、電話番号、メールアドレス）を下記の申込先までお申込下さい（電子メールをご利用下さい）。詳しくは大会ホームページを御覧下さい。

参加登録費：会員 一般 7,000 円、学生 4,000 円；非会員 一般 10,000 円、学生 5,000 円（講演要旨集代を含みます）

懇 親 会：平成 17 年 5 月 28 日（土）19 時～ 21 時（会費 一般 6,000 円、学生 3,000 円 会場：熊本交通センターホテル 3 階大ホール）

大会事務局、問合せ先：

〒 862-8502 熊本市月出 3-1-100

熊本県立大学環境共生学部内

第 8 回マリンバイオテクノロジー学会大会事務局

電話：096-383-2929 内線 771, 776 FAX：096-384-6765

電子メール：marinebi@pu-kumamoto.ac.jp

学会ホームページ：<http://www.soc.nii.ac.jp/jsmb/>

大会ホームページ：<http://www.pu-kumamoto.ac.jp/~marinebi/>

4. アブラムシ・カイガラムシ生物的防除国際シンポジウム開催のお知らせ

標記国際シンポジウムを下記の要領で開催します。ポスター発表や各セッションでの口頭発表を通じ、多くの研究者から最新の研究を公表していただけるのを期待しています。

1. 開催場所とその期間

鶴岡市（出羽庄内国際村）

2005年9月25日（日）～9月29日（木）

2. プログラム

基調講演

W. W. Murdoch (USA)

広瀬義躬（九州大学名誉教授）

セッション 1: 温室での生物的防除

Organizers: Dr. J. van Schelt (The Netherlands)

矢野栄二(近畿中国四国農業研究センター)

Invited reviewer: E. Yano (Japan)

Invited speaker: J. van Schelt (The Netherlands)

セッション 2: 土着天敵の保護利用

Organizers: E. W. Evans (USA)・櫻谷保之（近畿大学）

Invited reviewer: S. D. Wratten (New Zealand)

Invited speaker: W. Powell (UK)

セッション 3: 導入天敵の生態系へのリスク

Organizers: P. Kindlmann (Czech Republic)

高木正見（九州大学）

Invited reviewer: L. E. Ehler (USA)

Invited speaker: M. Colunga-Garcia (USA)

セッション 4: アリとの共生関係

Organizers: Prof. J.-L. Hemptinne (France)

上野高敏（九州大学）

Invited reviewer: J. Pasteels (Belgium)

Invited speakers: M. E. N. Majerus and Dr. J.J. Sloggett (UK)

セッション 5: ギルド内捕食

Organizers: Prof. W. W. Weisser (Germany)

安田弘法（山形大学）

Invited reviewer: W. E. Snyder (USA)

Invited speaker: A. R. Ives (USA)

セッション 6: 捕食者および寄生者の採餌・産卵行動

Organizers: Prof. A. F. G. Dixon (UK)

中牟田潔（森林総合研究所）

Invited reviewer: C. Bernstein (France)

Invited speaker: J. Pettersson (Sweden)

詳しくはホームページをご覧ください。

Homepage:

<http://www.bf.jcu.cz/tix/strita/aphidophaga/main.html>

実行委員長 広瀬義躬（九州大学名誉教授）

事務局 山形大学農学部 安田弘法

公募カレンダー

例年学会事務局に送付される学術賞，研究助成，共同研究などの公募を昨年の締切日順にまとめました。
詳細については，学会事務局あるいは各団体にお問い合わせ下さい。

名称又は種類	授賞又は助成団体	2004年締切 (*印：2005年締切)
研究助成	とうきゅう環境浄化財団 http://home.q07.itscom.net/tokyuenv	1月17日*
研究助成	財団法人 環境科学総合研究所	1月20日*
自然科学研究助成	三菱財団自然科学研究助成 http://www.mitsubishi-zaidan.or.jp	2月4日*
研究助成	日本生命財団 http://www.nihonseimei-zaidan.or.jp	5月6日
国際生物学賞	日本学術振興会国際生物学賞委員会	5月20日
研究助成	公益信託ミキモト海洋生態研究助成基金	5月7日
研究助成	http://www.jwrc.or.jp/ 花博記念協会助成事業	5月10日
研究助成	http://www.expo-cosmos.or.jp トヨタ財団	5月20日
研究助成	http://www.toyotafound.or.jp/ 公益信託富士フィルム・グリーンファンド	5月16日*
研究助成	http://www.jwrc.or.jp/ 公益信託四方記念地球環境保全研究助成基金	5月20日*
研究助成	http://www.jwrc.or.jp/ 公益信託増進会自然環境保全研究活動助成基金	5月21日
研究奨励賞	http://www.jwrc.or.jp/ 武田計測先端知財団	5月31日
共同利用研究（研究船白鳳丸）	http://www.takeda-foundation.jp/ 東京大学海洋研究所	7月31日
研究助成	http://www.ori.u-tokyo.ac.jp 日本証券奨学財団	8月13日
研究助成	http://www.jssf.or.jp 日産科学振興財団	10月15日
学術研究助成	http://www.nissan-zaidan.or.jp 藤原ナチュラルヒストリー振興財団	9月1日
沖縄研究奨励賞	沖縄協会 http://homepage3.nifty.com/okinawakyoukai/	9月30日
木原記念財団学術賞	木原記念横浜生命科学振興財団 http://www.city.yokohama.jp/me/kihara	9月30日
科学技術賞	東レ科学振興会 http://www.toray.co.jp/tsf/index.html	10月7日*
研究助成	東レ科学振興会 http://www.toray.co.jp/tsf/index.html	10月7日*
笹川科学研究助成	財団法人 日本科学協会 http://www.jss.or.jp	10月15日
生態学琵琶湖賞	滋賀県 http://www.ilec.or.jp/prize/j-index.html	9月15日
研究助成	鹿島学術振興財団	11月19日
共同利用研究	東京大学海洋研究所 http://www.ori.u-tokyo.ac.jp	11月28日
研究助成	財団法人 下中記念財団 http://www.shimonaka.or.jp/	12月10日*
研究助成	水産無脊椎動物研究所 http://www.rimi.or.jp/	12月31日

書 評

日本生態学会編(2004)「生態学入門」288 pp. 東京科学同人, 本体価格 2,940 円. ISBN: 4-8079-0598-8

私は勤務先で系統分類学, 鳥類学, 哺乳類学, 保全生物学などを獣医学部新入生向けにアレンジした講義を担当している。受講前に, 高校生物Ⅱ「生態・進化」の復習(未履修にとっては独習)を命ずる。が, 時期が悪い。黄金週間前で気もそぞろ。憧れの北海道(8割強は内地出身)は, スプリング・エフェメラル真っ最中。厳しい受験戦争で疲れ切った彼等は癒しを求める。最終的には「生物勉強してなくても, 入学が許可されるのだから, これって, 生物はいらないんだよね」とくる。こんなことが10年も続いている。

そのようなことから, 高校生でも理解可能として刊行された本書を心待ちにしていた。黄金週間の旅先に, 「すすきの」で行われる新歓ジンギスカン・パーティーの行き帰りに, 野幌の探鳥に, 必要最小限の情報が詰まった小振りなこの本は邪魔にならない。

本文の章構成は, 「身近な生物とその環境」, 「多様な生物界」, 「進化からみた生態」, 「生活史の適応進化」, 「生理生態的特性の適応戦略」, 「動物の行動と社会」, 「個体間の相互作用と個体群」, 「生物群集とその分布」, 「生態系の構造と機能」, 「環境保全と応用生態学」で, 最初の五つの章が進化を基盤にした。生物進化の歴史的産物である生物多様性の理解と保全を主軸に展開することを目指したのである。そして第6章から第9章で扱われる行動, 個体群動態, 群集, 生態系などがこれを補強し, 生物多様性と生態系の保全が最終章に配置され, 枚挙の連続で終わるのではなく, 基礎情報の解説を網羅しながら, ストーリーを保持していることは, 特色と云える。

しかし, 読者対象を考慮した場合, 進学や関連職域についての具体的な記述があっという。たとえば, 最終章を担当された方々は国立環境研究所の気鋭であり, 彼等の施設紹介をしながらの記述も面白いのではと感じた。シカやクマなどのようなカリスマ的な動物の保護管理計画を実行している地方自治体の行政の苦労話(例: 保護管理施策と愛護団体との相克など)や, そのような職種に就くにはどういった大学学部があるのかといった情報もあって欲しい。なお, 「刊行のいきさつ」の中で, 「生物系学部」へ進学する生徒はとても少ないとの記述であったが, 従来の関連学部に加え, 工学部や人文社会学, 法学, 経済などでも, 生物体や生態系, 環境問題を対象にした分野は着実に広まりつつあるので, そういった多様な分野を俯瞰(交通整理)することは読者に有益であろう。

また, 高校生物の他分野(案: せっかく真核細胞の起源について言及しているのだから, 細胞共生説を引用し, 一つの細胞に二つの呼吸様式が併存する Why と How の説明をする)や他科目との関連付け(案: 植生史では, 地学の海峡成立史や地理の大陸棚, 日本史の縄文時代のはじまりなどを関連づけ, 氷期を身近なものとする)は, 日々の勉強で得た断片的な知識のネットワークとな

り, 新たな知的興奮の源にもなろう。さらに, 本書で登場する専門用語(特に, カタカナ書きのもの!)については, 原語表記(案: おもに英語で, 日本語表記の直後に括弧で併記するなど)があると, その意味を自分で辞書で引き, 理解できる助けとなる。

このほかにも, 細かな点の気になる記述や訂正して欲しい点などが散見されることは確かである(初めての試みなので, 当然です)。が, 日本生態学会が, 生態学コア・カリキュラムの提示をするという意気込みは伝わってきたし, 我々, それを利用したいと思うものも, 積極的な提案すべきであろう。そういった意見を, 随時, 汲み取る仕組みを生態学会が設けておくことも要望したい。たとえば, 同学会のホームページに専用掲示板を設け, そのアドレスを「あとがき」に掲載する。ものすごく, 活発な意見交換を期待してはならない(「刊行のいきさつ」参照)。生態学の教育は, いわゆる息の長いフィールド研究よりも, ゼーと時間がかかるものだから, 期待したい。

(酪農学園大学・浅川満彦)

中静 透著(2004)「日本の森林/多様性の生物学シリーズ① 森のスケッチ」252 pp. 東海大学出版会, 本体価格 3,400 円. ISBN: 4-486-01637-8

本書は全5巻シリーズの第1巻で, 以下菌類・哺乳類・鳥類・昆虫と続く。ちなみに, 第2巻「菌類の森」は本誌54巻3号に福田秀志氏による書評がある。第2巻以降の書名がいずれも「○○の森」であるのに, 本書だけが「森のスケッチ」となっている。以下の導入部としての意味づけ, あるいは/そして「樹木の森」とするわけにもいかず付けたものかと愚考している。なお, その内容は書名の語感から受けるほど軽いものではない。英題は Story of Forests Trees and Japan, これについては後述する。

著者は, 日本の森林の樹種構成や多様性の成り立ちを紹介することを本書の目的とする(はじめに)としている。そして, 著者自身の20年以上にわたる研究・経験に基づいた主張が説得力を持って読者に迫ってくる。

1章「樹木の多様性はどのように決まるか」では多様性を決定する要因として, 気候・土壌・地形などの古典的要因や近年あらためて注目されてきた地史的要因に加え, 著者が重要視する攪乱や生物相互作用, 人為的要因を概観している。2章「森林のダイナミクス」では多様性維持機構としてのダイナミクス, 中でも様々な時間・空間スケールで見られる自然攪乱(風倒・山火事・土砂くずれなど)がはたす役割に言及している。そして, 攪乱はいたる所で起こっており, また「極相種」を含むほとんどの樹種が攪乱に依存して個体群を維持しているとする。3章「樹木の生活史戦略とその多様性」では樹木の生活史段階(種子-実生-稚樹-繁殖)の多様性の紹介と, 樹種ごとに異なる生活史段階での戦略が個体群の維持をもたらすと同時に, 異なる戦略をもつ樹種が共存することで森林の多様性がもたらされていると述べている。こうした自然のシステムが人間活動によってどのように変化したのかを見たのが以下の章である。4章「二

次林の成り立ち]では極相林と同じく、二次林の成立もまた多様であると説く。林内放牧・炭焼き・造成された薪炭林、さらには失敗した人工林など、人間と森林の相互作用の歴史に応じてできあがった様々な二次林を紹介している。5章「人間と森林の付き合い方の変貌」ではここ数十年間の森林の変化を、人工林・ブナ林・保護林・二次林を具体例で紹介している。そして、多様性の保全のための森林(土地)利用も含めたデザインの必要性を説いている。

記述の中には、「遷移」・「r-K 戦略」・「萌芽」・「耐陰性」など、著者の指摘によって認識を新たにさせられた術語もあった。また、世界の森林分布で見ると乾燥によって森林が成立しない場所の方が低温による場所より広いとか、東アジア全体で見ると森林の垂直分布と水平分布は同じ様な変化にはならない、あるいは北半球全体で見るとナラ林が一般的でブナ林の方が特殊であり、わが国の温帯落葉広葉樹林の分布域はブナ帯よりナラ帯と呼ぶ方がふさわしいなどなど、「日本の常識は世界の非常識」ともいうべき記述が、国内の知識しかない私には新鮮な驚きをもたらしてくれた。日本にも乾期がある、もその一つである。日本海側と太平洋側の植生の違い(=背腹性)をもたらす気候条件の違いとして、従来は日本海側の多雪のみが目されてきた。しかし、太平洋側の冬は低温による生育不適期にあたっているため等閑視されてきたが、世界的に見ると立派な乾期にあたるという。その乾期後半(2~4月)に多発する山火事が二次林の成立に大きく関与しているという。また、数千年前(すなわち縄文時代)にも山火事はあり、太平洋側の森林は数千年単位で山火事の影響を受け続けてきた。このため当時から太平洋側の森林は日本海側とは違っていた。「中間温帯林」はこの山火事の影響下で成立した森林植生と考えられるとしている。

ただ、山火事の原因はいつの時代でも人為的なもので、縄文時代、狩りを行うために火を放ったとする推定まで引用しているがどうだろうか。農耕以前の縄文人は争いを好まず、戦争は弥生時代以降のこととする「神話」は崩れつつあるようだが、生活の多くを森林とその恵に依存し、また列島全体でも最大30万人(人口密度で1人/km²)程度と見積もられている(佐原1987)縄文の人々が、現代人のように「野蛮」に広大な面積の森林を破壊し尽くしたもののなかだろうか。もちろん失火はあっただろうが、制御が困難なだけにその扱いには慎重であったと考えたい。落雷や摩擦などによる自然発火(野火)はなかったのだろうか。もっとも、「主食」のドングリを効率よく採取するために、火入れによってナラ林に誘導したとするなら話は別だが、考古学的知見との整合性も検討する必要があるだろう。

さて英題であるが、私は最初これを見たときには and は in か of の間違いではと思った。本書で扱っているのは森林とその構成種の樹木であるが、その森林の現状から見えてくるもの、問われているのは日本のそして日本人の姿である。Forests(,) Trees and Japan なのだった。この英題の方にこそ著者の思いが込められていると感じた。

ところで、著者らが森林の大面积長期観察を学会大会の話題としたのは第38回大会(1991 於奈良女子大学)の自由集会でのことであった。思えば、あの集会を中間点に本書が生まれたことになる。私はそのテーマに注目しつつも、論文になりにくいだろうと他人事ながら心配もしていた。その時の発表者も現在、皆一線で活躍中であるし、本書で紹介されているような成果も得られ、その心配も杞憂に終わってくれたようである。しかし、大学・研究所の独立行政法人化、職員の非公務員化に続いて成果主義の導入などが喧伝されている。税金が使われている以上、納税者の前にその成果を明らかにし評価を得ることは当然ではあるが、さて何で評価すべきなのか。安易に論文の数を基準にしたりすれば、本書で紹介されている森林動態の研究などは間違いなく最低ランクに位置づけられよう。彼らのような研究者を(言葉が悪くて申し訳ないが)養っていくことも、この国にとっては必要なことと私などは考えるのだが、果たして一般国民に受け入れられるのか、はなはだ心許なく感じてしまう。本書で紹介されている事例の多くは現在も調査・研究が継続されている。著者は『百年後に、私がこの本で書いたことが誤っている、とわかるかもしれない。多様性を認識しながらいくつかの変化を長く見る、このことが重要である』(あとがき)というが、百年後評価する人間が誰もいなかったなどという事態だけは避けなければならぬ。これもまた私の杞憂に終わってくればと思う。

価格はやや高目に設定されているが、術語の解説もあり、また「縦書き」の本では省略されがちな引用文献や索引も充実している。読者として想定されているであろう若手の入門書・参考書としてはもちろん、一線の研究者にもお勧めしたい一書である。

最後に、「画竜点睛を欠く」というと表現が古いが残念なことが一つある。多忙な著者が原稿締切を何度も延ばしてもらい、細切れの時間をつなぎ合わせて書き上げた(あとがき)ためか校正漏れが散見されることである。多くはワープロの誤変換や「てにをは」の変更後の見落としであったため判読可能であったが、増刷時にでも訂正してもらえればと思う。

引用文献

佐原眞(1987)「大系日本の歴史1 日本人の誕生」, 350 pp, 小学館。

(木工舎「ゆい」 橋利彦)

松原洋子・小泉義之編(2005)「生命の臨界一争点としての生命一」306 pp. 人文書院, 本体価格 2,600 円. ISBN: 4-409-04072-3

日々、それぞれの研究に忙しくしているとき、脳裏を占めるのはあふれるような疑問と、その疑問にどのように取り組んでいこうかという短い射程のことがらであろう。そんな忙しいときにこそ、逆にちょっと腰を落ち着けて、いま生態学はどこにいるかを考えてもよいのではないだろうか。本書は、現状を振り返ってみるよい機会を生態学者に与えてくれるはずである。

本書の第1章「医学と科学」はヒトゲノム時代の遺伝

学の現状を、第2章「生命と教育」は現在の生と死とそれをめぐる教育の現状を考察している。生態学は第3章にある。第4章は生物学と現代の政治との接点を考察している。各章とも担当者自身の論考とインタビューまたは対話形式とで構成されている。インタビューまたは対話形式は、なるほどそういう見方もあるのかと担当者の論考を再確認する事ができる。

扱っている題材は異なっているが、論点の進め方は4章を通して、共通している。まず、表面に問題として顕著になってきている、20世紀のそれぞれの分野の動きを概観する。19世紀あたりからの歴史もたどる。そして問題点を抽出し、意見は述べない。これから先に通用する視点を確立しようとする。今表面に表れている問題は、新しい地平が切り開かれていく端緒であると認識する。20年くらいたって、この視点で問題を透視することができたか、検証したい雰囲気である。

第3章の著者遠藤彰氏は日本生態学会会員であり、狩りバチの生態学研究に「手を汚した動物学者」である。ひとつひとつの言葉は重い。生態学の現状を遺伝学の動きと比較してみる。遺伝学でヒトゲノムが解読され、素晴らしい進歩のようであるが、実は細胞レベルまでの広大な「複雑系」の地平が見えてきたわけで、生態学のほうが、あるいはもっと遠くに来ているのかもしれないと説く。生態遷移という動態をとらえることが生態学の基本であると主張し、その研究の歴史を振り返ってみる。「生態遷移」を見通したと思ったカウルズたちとそれに批判を向けたグリーンソンの時代は古きよき時代かもしれないという。エルトンからシェルフードあたりの20世紀初期の生態学の考え方を基底にして21世紀に切り込んで行きたいとしている。

インタビュー形式のところで、遠藤氏の主張は猛烈な揺さぶりを受ける。現在巷に流布しているさまざまな言説をどのように整理し、生態学は主張していくか試されている。「公害問題」「環境問題」「エコロジー」「生物多様性条約」「進化生態学」「京都議定書」「絶滅危惧種」「環境評価」「ナショナル・トラスト」・・・みんな現代的課題である。遠藤氏は、現代的保全の問題に取り組むにしても、今まで取り組んできた生態遷移論をより新しいものにして、中軸に据えたいと考える。フィールドでこしことデータをとり続けていくことがもちろん重要で基本である。そして、遷移論の基本的な考え方を歴史の見地から検証してみたらどうだろうか提案する。この検証は、現在ギリギリするような、臨界点に達したような生命をめぐる諸問題と共通してくるのではないだろうかと語りかけてくる、本書全体のスリリングな生命論、身体論も目を通して、他の生物学分野と一緒に、強靱な理論を構築していこうではないかと提案している。

(矢島道子)



京都大学
生態学研究センター
Center for Ecological Research
Kyoto University

京都大学生態学研究センター
〒520-2113 滋賀県大津市平野2丁目509-3
Tel : (077) 549-8200 (代表), Fax : (077) 549-8201
センター長 大串隆之

Center for Ecological Research, Kyoto University
2-509-3 Hirano, Otsu, Shiga,
520-2113, Japan
Home page : <http://www.ecology.kyoto-u.ac.jp>

センターの動向

- 1) 2004年11月15日に第39回運営委員会および第49回協議委員会が京大会館にて開催されました。
- 2) 2005年2月9日に第50回協議委員会が京都大学時計台記念館にて開催されました。この協議委員会でセンターの大串隆之教授が次期センター長として選出されました。任期は2005年4月1日から2007年3月31日までの2年間です。
- 3) 奥田 昇氏が、2005年2月1日付で愛媛大学沿岸環境科学研究センターより助教授として着任されました。
- 4) 2005年度外国人研究員として、4月1日から6月30日までアムステルダム大学（オランダ）よりMaurice W. Sabelis氏（客員研究員）、4月15日から3月31日までエドモンズ・コミュニティーカレッジ（アメリカ合衆国）よりRichard W. Sheibley III氏（21世紀COE）、5月1日から7月31日までウイスコンシン大学（アメリカ合衆国）よりTeresa C. Balsler氏（客員研究員）が滞在予定です。
- 5) 2004年度外国人研究員のArndt Telschow氏（客員研究員）とMerijn Van Tilborg（COE研究員）は2005年3月31日で任期を終え、帰国されます。
- 6) COE研究員の加賀田秀樹氏、里村多香美氏、源 利文氏は、2005年3月31日付で任期を終えられます。
- 7) 2月11日より生態学研究センターの住居表示が変更になりました。
新住所 〒520-2113 滋賀県大津市平野2丁目509-3

お知らせ

生態学研究センターは2005年（平成17年）度の共同利用事業の一環として、研究会や野外実習などの公募を行っています。詳しくは当センターのホームページ（<http://www.ecology.kyoto-u.ac.jp/koubo/coop2005.pdf>）を参照ください。なお公募締切は2005年4月8日です。

日本生態学会役員一覧

会長	鷺谷 いづみ	2004.1 ~ 2005.12
次期会長	菊沢 喜八郎	2006.1 ~ 2007.12
全国委員		
全国区	巖佐 庸	2004.1 ~ 2005.12
	占部 城太郎	2004.1 ~ 2005.12
	大沢 雅彦	2004.1 ~ 2005.12
	粕谷 英一	2004.1 ~ 2005.12
	可知 直樹	2004.1 ~ 2005.12
	菊沢 喜八郎	2004.1 ~ 2005.12
	甲山 隆司	2004.1 ~ 2005.12
	齋藤 隆	2004.1 ~ 2005.12
	嶋田 正和	2004.1 ~ 2005.12
	竹中 明夫	2004.1 ~ 2005.12
	椿 宜高	2004.1 ~ 2005.12
	東 正剛	2004.1 ~ 2005.12
	広瀬 忠樹	2004.1 ~ 2005.12
	矢原 徹一	2004.1 ~ 2005.12
	山本 進一	2004.1 ~ 2005.12
地方区	工藤 岳 (北海道)	2004.1 ~ 2005.12
	竹原 明秀 (東北)	2004.1 ~ 2005.12
	樋口 広芳 (関東)	2004.1 ~ 2005.12
	小泉 博 (中部)	2004.1 ~ 2005.12
	中静 透 (近畿)	2004.1 ~ 2005.12
	國井 秀伸 (中四国)	2004.1 ~ 2005.12
	鈴木 英治 (九州)	2004.1 ~ 2005.12
常任委員		
	大串 隆之	2004.3 ~ 2005.12
	齋藤 隆	2004.1 ~ 2005.12
	嶋田 正和	2004.1 ~ 2005.12
	中静 透	2004.1 ~ 2005.12
	長谷川 眞理子	2004.1 ~ 2005.12
	矢原 徹一	2004.1 ~ 2005.12
幹事長	中根 周歩	2002.1 ~ 2005.12
庶務幹事	中坪 孝之	2002.1 ~ 2005.12
会計幹事	橋本 博明	2002.1 ~ 2005.12
会計監事	遠藤 彰	2003.1 ~ 2005.12
	石原 道博	2005.1 ~ 2007.12

Ecological Research 編集委員会

編集委員長	巖佐 庸	2005.1 ~ 2007.12
編集幹事	矢原 徹一	2005.1 ~ 2007.12
	津田 みどり	2005.1 ~ 2007.12
	井鷺 裕司	2005.1 ~ 2007.12
編集委員	石田 厚	2003.4 ~ 2005.12
	野田 隆史	2003.4 ~ 2005.12
	相場 慎一郎	2003.7 ~ 2005.12
	高橋 耕一	2003.7 ~ 2005.12
	柴田 英昭	2003.7 ~ 2005.12
	立澤 史郎	2003.7 ~ 2005.12

日本生態学会誌編集委員会

編集委員長	大串 隆之	2005.1 ~ 2007.12
編集幹事	山内 淳	2005.1 ~ 2007.12
	陀安 一郎	2005.1 ~ 2007.12
	酒井 章子	2005.1 ~ 2007.12
編集委員	齋藤 隆	2005.1 ~ 2007.12
	近藤 倫生	2005.1 ~ 2007.12
	佐竹 暁子	2005.1 ~ 2007.12
	津田 みどり	2005.1 ~ 2007.12
	畑田 彩	2005.1 ~ 2007.12

土谷 岳令	2003.7 ~ 2005.12
岩崎 敬二	2003.7 ~ 2005.12
中野 伸一	2003.7 ~ 2005.12
玉置 昭夫	2003.7 ~ 2005.12
井上 幹生	2003.7 ~ 2005.12
小林 剛	2003.9 ~ 2005.12
伊東 明	2003.9 ~ 2005.12
関島 恒夫	2004.4 ~ 2007.12
市岡 孝朗	2004.4 ~ 2007.12
島田 卓哉	2004.4 ~ 2007.12
陶山 佳久	2004.4 ~ 2007.12
榎木 勉	2004.4 ~ 2007.12
佐藤 一憲	2004.4 ~ 2007.12
谷内 茂雄	2004.4 ~ 2007.12
谷口 義則	2004.4 ~ 2007.12
杉本 敦子	2005.1 ~ 2007.12
高村 典子	2005.1 ~ 2007.12
柴田 鏡江	2005.1 ~ 2007.12
酒井 章子	2005.1 ~ 2007.12
Michael Boots	2005.1 ~ 2007.12
Barray W. Brook	2005.1 ~ 2007.12
Jae Chun Choe	2005.1 ~ 2007.12
Tae-Soo Chon	2005.1 ~ 2007.12
Richard T. Corlett	2005.1 ~ 2007.12
Franck Courchamp	2005.1 ~ 2007.12
Tom J. de Jong	2005.1 ~ 2007.12
Raghavendra Gadagkar	2005.1 ~ 2007.12
Wooi Khoon Gong	2005.1 ~ 2007.12
Upali Nimal Gunatilleke	2005.1 ~ 2007.12
Sun-Kee Hong	2005.1 ~ 2007.12
Shwu-Bin Horng	2005.1 ~ 2007.12
Mark O. Johnston	2005.1 ~ 2007.12
Chul-hwan Koh	2005.1 ~ 2007.12
Simon A. Levin	2005.1 ~ 2007.12
Michael A. McCarthy	2005.1 ~ 2007.12
Helene C. Muller-Landau	2005.1 ~ 2007.12
Navjot Singh Sodhi	2005.1 ~ 2007.12
Simon Thrush	2005.1 ~ 2007.12
Claus Wedekind	2005.1 ~ 2007.12
Ping Xie	2005.1 ~ 2007.12

広瀬	祐司	2005.1 ~ 2007.12
西田	隆義	2005.1 ~ 2007.12
島野	光司	2005.1 ~ 2007.12
鈴木	英治	2005.1 ~ 2007.12
日浦	勉	2005.1 ~ 2007.12
鎌田	直人	2005.1 ~ 2007.12
酒井	聡樹	2005.1 ~ 2007.12
中丸	麻由子	2005.1 ~ 2007.12
三浦	徹	2005.1 ~ 2007.12
鷺谷	いづみ	2005.1 ~ 2007.12
野田	隆史	2005.1 ~ 2007.12
工藤	岳	2005.1 ~ 2007.12
井鷺	裕司	2005.1 ~ 2007.12
奥田	昇	2005.1 ~ 2007.12
市岡	孝朗	2005.1 ~ 2007.12
宮竹	貴久	2005.1 ~ 2007.12
工藤	洋	2005.1 ~ 2007.12
安井	行雄	2005.1 ~ 2007.12
古賀	庸憲	2005.1 ~ 2007.12
辻	和希	2005.1 ~ 2007.12
彦坂	幸毅	2005.1 ~ 2007.12

保全生態学研究編集委員会

編集委員長	松田 裕之	2003.4 ~ 2006.3
編集幹事	椿 宜高	2003.4 ~ 2006.3
	西廣 淳	2003.4 ~ 2006.3
編集委員	石井 実	2003.4 ~ 2006.3
	梅原 徹	2003.4 ~ 2006.3
	大串 隆之	2003.4 ~ 2006.3
	加藤 真	2003.4 ~ 2006.3
	角野 康郎	2003.4 ~ 2006.3
	倉本 宣	2003.4 ~ 2006.3
	小池 文人	2003.4 ~ 2006.3
	高槻 成紀	2003.4 ~ 2006.3
	高村 典子	2003.4 ~ 2006.3
	館野 正樹	2003.4 ~ 2006.3
	田村 典子	2003.4 ~ 2006.3
	中越 信和	2003.4 ~ 2006.3
	長谷川 雅美	2003.4 ~ 2006.3
	長谷川 真理子	2003.4 ~ 2006.3
	日置 佳之	2003.4 ~ 2006.3
	藤岡 正博	2003.4 ~ 2006.3
	堀 良通	2003.4 ~ 2006.3
	湯本 貴和	2003.4 ~ 2006.3
	鷺谷 いづみ	2003.4 ~ 2006.3
	相生 啓子	2004.1 ~ 2006.12
	小池 裕子	2004.1 ~ 2006.12
	佐藤 哲	2004.1 ~ 2006.12
	中丸 麻由子	2004.1 ~ 2006.12
	早矢仕 有子	2004.1 ~ 2006.12
	増田 理子	2004.1 ~ 2006.12

自然保護専門委員会

委員長	増沢 武弘：高山・亜高山
-----	--------------

副委員長	中井 克樹：近畿	2004.8 ~ 2006.3
幹事	立川 賢一：海洋	2004.8 ~ 2006.3
地区委員	佐藤 謙：北海道	2004.8 ~ 2006.3
	紺野 康夫：北海道	2004.8 ~ 2006.3
	竹原 明秀：東北	2004.8 ~ 2006.3
	佐原 雄二：東北	2004.8 ~ 2006.3
	加藤 和弘：関東	2004.8 ~ 2006.3
	上條 隆志：関東	2004.8 ~ 2006.3
	戸田 任重：中部	2004.8 ~ 2006.3
	和田 直也：中部	2004.8 ~ 2006.3
	河野 昭一：近畿	2004.8 ~ 2006.3
	安溪 遊地：中国四国	2004.8 ~ 2006.3
	鎌田 磨人：中国四国	2004.8 ~ 2006.3
	野間口真太郎：九州	2004.8 ~ 2006.3
	逸見 泰久：九州	2004.8 ~ 2006.3
	伊澤 雅子：九州	2004.8 ~ 2006.3

専門別委員

久保田康裕：熱帯・亜熱帯	2004.8 ~ 2006.3
竹門 康弘：陸水	2004.8 ~ 2006.3
戸塚 績：酸性雨	2004.8 ~ 2006.3
矢原 徹一：IUCN	2004.8 ~ 2006.3
小川 潔：環境教育	2004.8 ~ 2006.3
清水 善和：島嶼	2004.8 ~ 2006.3
井鷺 裕司：遺伝子	2004.8 ~ 2006.3
松田 裕之：生態系管理	2004.8 ~ 2006.3
村上 興正：環境行政	2004.8 ~ 2006.3

将来計画専門委員会

委員長	可知 直毅	2003.4 ~ 2005.3
副委員長	粕谷 英一	2003.4 ~ 2005.3
	巖佐 庸	2003.4 ~ 2005.3
	鈴木 邦雄	2003.4 ~ 2005.3
	辻 和希	2003.4 ~ 2005.3
	酒井 聡樹	2003.4 ~ 2005.3
	花里 孝幸	2003.4 ~ 2005.3
	杉本 敦子	2003.4 ~ 2005.3
	下田 路子	2003.4 ~ 2005.3
	安井 行雄	2003.4 ~ 2005.3
	向井 宏	2003.4 ~ 2005.3
常任オブザーバー	中根 周歩	2003.4 ~ 2005.3
	松本 忠夫	2003.4 ~ 2005.3

生態学教育専門委員会

委員長	渡辺 守	2004.4 ~ 2006.3
	木村 和喜夫	2004.4 ~ 2006.3

嶋田 正和	2004.4 ~ 2006.3
林 浩二	2004.4 ~ 2006.3
廣瀬 裕司	2004.4 ~ 2006.3
矢島 道子	2004.4 ~ 2006.3
中村 浩志	2004.4 ~ 2006.3
山村 靖夫	2004.4 ~ 2006.3
西脇 亜也	2004.4 ~ 2006.3

大規模長期生態学専門委員会

委員長	中静 透	2003.4 ~ 2007.3
	小泉 博	2003.4 ~ 2007.3
	東 正剛	2003.4 ~ 2007.3
	甲山 隆司	2003.4 ~ 2007.3
	占部 城太郎	2003.4 ~ 2007.3
	谷内 茂雄	2003.4 ~ 2007.3
	三宅 洋	2003.4 ~ 2007.3
	佐竹 暁子	2003.4 ~ 2007.3
	酒井 章子	2003.4 ~ 2007.3
	田中 健太	2003.4 ~ 2007.3
	福島 路生	2003.4 ~ 2007.3

生態系管理専門委員会

委員長	矢原 徹一	2003.6 ~ 2005.3
	村上 興正：自然保護	2003.6 ~ 2005.3
	中越 信和：景観生態	2003.6 ~ 2005.3
	中根 周歩：森林	2003.6 ~ 2005.3
	田村 典子：森林	2003.6 ~ 2005.3
	鎌田 磨人：森林・河川	2003.6 ~ 2005.3
	津田 智：草原	2003.6 ~ 2005.3
	高村 典子：湖沼	2003.6 ~ 2005.3
	西廣 淳：湖沼	2003.6 ~ 2005.3
	角野 康郎：湖沼・水田	2003.6 ~ 2005.3
	日鷹 一雅：水田・農耕地	2003.6 ~ 2005.3
	波田 善夫：湿地	2003.6 ~ 2005.3
	神田 房行：湿地	2003.6 ~ 2005.3
	加藤 真：渚・生物間相互作用	2003.6 ~ 2005.3
	国井 秀伸：汽水・河口	2003.6 ~ 2005.3
	佐藤 利幸：高山	2003.6 ~ 2005.3
	竹門 康弘：河川	2003.6 ~ 2005.3
	中村 太士：河川	2003.6 ~ 2005.3
	立川 賢一：海洋	2003.6 ~ 2005.3
	向井 宏：海洋	2003.6 ~ 2005.3
	椿 宜高：個体群	2003.6 ~ 2005.3
	松田 裕之：管理モデル	2003.6 ~ 2005.3
	嶋田 正和：管理モデル	2003.6 ~ 2005.3

長谷川真理子：科学技術政策
2003.6 ~ 2005.3
塩坂 比奈子：普及 2003.6 ~ 2005.3

公開講演会委員会

委員長 石原 道博
大原 雅
紙谷 智彦

日本生態学会賞及び宮地賞選考委員会

占部 城太郎 2004.10 ~ 2005.12
中静 透 2004.10 ~ 2005.12
樋口 広芳 2004.10 ~ 2005.12

論文賞選考委員会

(任期は Ecological Research 編集委員会と同じ)
委員長 巖佐 庸
中根 周歩
Ecological Research 編集委員

学術会議担当

松本 忠夫 2003.7.26 ~ 2006.7.25
(第 19 期)

電子化検討委員会

委員長 遊磨 正秀 2004.10 ~ 2007.9
副委員長 竹中 明夫 2004.10 ~ 2007.9
久保 拓弥 2004.10 ~ 2007.9
山内 淳 2004.10 ~ 2007.9
江副 日出夫 2004.10 ~ 2007.9
木部 剛 2004.10 ~ 2007.9
土倉 大明 2004.10 ~ 2007.9
中坪 孝之 2004.10 ~ 2007.9

事務局整備検討委員会

委員長 中根 周歩 2004.10 ~
副委員長 小泉 博 2004.10 ~
土田 勝義 2004.10 ~
大串 隆之 2004.10 ~
松田 裕之 2004.10 ~
遊磨 正秀 2004.10 ~
竹中 明夫 2004.10 ~

大会企画委員会

委員長 難波 利幸 2005.1 ~ 2007.12
副委員長 竹中 明夫 2005.1 ~ 2007.12
石濱 史子 2005.1 ~ 2007.12
石原 道博 2005.1 ~ 2007.12
占部 城太郎 2005.1 ~ 2007.12
紙谷 智彦 2005.1 ~ 2007.12
神田 房行 2005.1 ~ 2007.12
工藤 慎一 2005.1 ~ 2007.12
齋藤 隆 2005.1 ~ 2007.12
中坪 孝之 2005.1 ~ 2007.12

山内 淳 2005.1 ~ 2007.12

国際対応委員会

委員長	菊沢 喜八郎	2005.1 ~ 2007.12
	大沢 雅彦	2005.1 ~ 2007.12
	大園 享司	2005.1 ~ 2007.12
	北山 兼弘	2005.1 ~ 2007.12
	杉本 敦子	2005.1 ~ 2007.12
	中静 透	2005.1 ~ 2007.12
	中根 周歩	2005.1 ~ 2007.12

野外安全管理委員会

委員長	粕谷 英一	2005.1 ~ 2007.12
	大館 智志	2005.1 ~ 2007.12
	鈴木 準一郎	2005.1 ~ 2007.12
	戸田 正憲	2005.1 ~ 2007.12
	森広 信子	2005.1 ~ 2007.12
	山下 直子	2005.1 ~ 2007.12
	湯本 貴和	2005.1 ~ 2007.12

(役職にかかわる委員の任期は上記の任期にかかわらず、その役職の任期とする)